

鹿児島藩の学制改革と静岡藩からの影響

——(一) 静岡藩のお貸人を中心に——

井原 政 純

はじめに

維新时期における鹿児島藩の教育近代化への施策は、明治元年五月、造士館に和・漢・洋学の三局を設置することに始まり、同二年二月の藩治職制において造士館を改め、知政所の管下とし、以後「学館」と唱えるという改革、同四年には学館を廃止し、「本学校—小学校・郷校の制」を樹立するという、この三回にわたる学制の改革の経過においてみることで、学校及び教育面の近代化に向かって大きな変化と発展がみられる。とくに、第三回目の学制改革は、明治四年（一八七二）一月、学館（造士館）を廃止し、その跡に本学校を建て、これを中心とする小学校・郷校の制を立てて学校の設立、教育の普及を図っていったという画期的な施策であった。

ここで注目したいのは、明治四年初めの「本学校—小学校・郷校」の樹立と、その後の鹿児島藩・県の学校教育制度に大きな影響を与えたのが、静岡藩からの「お貸人」たちであったことである。鹿児島

藩からの招聘に応じ、沼津兵学校創立の立役者「阿部潜」を顧問として、同兵学校三等教授方（のち付属小学校頭取）「蓮池新十郎」、その子息「蓮池源吾」、同兵学校第二期資業生「堀田徳次郎」、同第三期資業生「吹田鯛六」、ほか英学に名ある「名村五八郎」、「小林弥三郎」「佐久間貞」らを随行させている。暫くして「塚原直太郎」「望月次郎」「小川元治郎」「志村太郎」らの医学修業（生）関係の人たち、同五年頃に招聘の第三期資業生「矢吹秀一」、同六年七月に来鹿した兵学校教授方手伝「山田昌邦」などといった人物、すなわち「お貸人」たちであった。「お貸人」という表現は鹿児島藩では用いておらず、これらの人びとを「招聘した」という表現をしている。

そこで当該発表では、鹿児島藩の学制改革に影響を与えた静岡藩からの人物と学制について、第一回は、静岡藩のお貸人を中心に、第二回は本学校—小学校・郷校の制とその後の学校制度及び規則等を中心に、と分けて考察したい。

今回「静岡藩のお貸人」の究明で意図するところは、静岡藩の兵学

校及び付属小学校の關係者の鹿児島藩での活躍・動静をできるだけ探ってみること、鹿児島藩側の交流など關係人物は誰であったか、彼等の人間關係はどうであったのか、といった人物にかかわる考察を当該時代の歴史的状况及び教育史上に投影してみたいというところにある。

とはいえ、静岡藩からみた、または検討された「諸藩への御貸人」や「員外資業生」などの研究発表^⑤・關係史料が比較的多いのに対して、鹿児島藩側の招聘者（静岡藩からのお貸人）にかかわる管見史料が極めて少ない。今後は機会あるごとに彼我両藩に関する人物や事項・事柄の接点を探りうる史料を求めていく作業、とくに鹿児島藩側での関連史料の発掘に務めることがこれからの課題であると考ええる。

そこで今回は、鹿児島藩側の管見に入った若干の史料を取り上げることによって静岡藩との接点・關係を求めてみようとおもう。

一 明治二年代にみられる両藩の人的交流

維新时期において、鹿児島藩から静岡藩との關係を知る史料に『市来四郎自叙伝』^⑥がある。

次に挙げる自叙伝の記述は、明治二年、四十二歳のときのものである。（①②③の番号は史料検討上から筆者がつけた）

①「是より先き明治二年の春、予東京に在りて、同志人と当時集議院の不体裁を論し、国会の体裁に擬し、拡張を謀れり、同志人員八旧

幕臣赤松（則良）・宇都宮三郎・松元良順・阿部潜・桑原清蔵・榎本亨蔵、鹿児島にハ、内田政風・伊集院兼寛・上原源之丞及び予等なりき、国会の体裁ハ、赤松氏が洋書に依りて調べたり、然れとも当時祭政一致を主義とせられ、遂に水泡に帰したり、江藤氏等の建言を以て、国会論の嚆矢と唱ふと雖とも、五六年前に我輩ハ如斯既に主唱したり、然して明治四年辛未七月、廢藩置県発令の際赤松・宇都宮等の諸氏と議して、将来必ず国民に参政の権を与へざるへからざるを痛論して、西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允に向て建論せり、然れとも時機尚早しとて、水泡に帰したり、」

②「今年九月日（未詳）、藩兵二大隊の輜重を宰し、東京へ出て、神田橋の藩邸（旧庄内藩現今印刷局の地）に在宮す、（中略）

因、当時薩・長・土の三藩威望あり、特に本藩ハ兵強く衆望あり、兵員の品行正しく、各藩風を慕ふ者多く、朝野の間に重きを為す、戦後の人心頼て安する所あり、

又当時東京市内の情况ハ、貴賤貧困を極むること譬ふるものなし、旧幕臣悉く各所に流離転沛し、邸宅空虚律棘の藪となり、帰農帰商して四方に分散し、諸侯大小の邸宅も、皆な荒廢草律軒を蔽ひ、壮麗を極めたる大名小路も、悉く廢墟と変し、市街の過半退転して、小民飢餓に陥れり、（中略）

御幸以来少しく人心安堵し、民業稍々開けたれとも、昔日に比すれば、百分の一なり、従て人心恟々、未だ堵に安せず、各藩の兵隊充

満横暴を極め、人民愁苦を訴ふ、旧幕臣中氣概あるものは、各所に潜匿し、時を窺ふもの多し、(中略)

当時旧幕臣にして薩・長・土を怨望する甚し、特に島津家か徳川家の姻戚でありながら、討幕の主謀となり、徳川家を困めたりと思惟し、怨惡の情最も深し、是か為め人心定まらず、彼我反目の情を絶たす、之を和解すること、国家の要点なるを以て、予内田政風・伊集院兼寛と議し、旧幕士宇都宮三郎・山縣十蔵・阿部潜等と交はり互ひにその所懐を叩き、榎本享蔵・桑原清蔵・赤松大三郎・松元良順等の人々と俱に周旋す、

同年夏(月日未詳)、予は阿部潜と同行、沼津に行き、兵学校を視察す、然して静岡に至り、山岡鐵太郎・大久保一翁を訪ひ、時事を談したり、是を徳川家人の惡感情を解くの端緒とす、尋て同校の教員数名(前島密^{つひ}外数人)を雇ひ、鹿兒島に遣る、之を鹿兒島兵学校の開初とす、兵学校は初め島津兵庫(一門旧加治木領主)の旧宅に創設し、静岡藩より雇ひたる教師を以て教授せり、又伊地知正治と謀り、戊辰上野戦亡者の石碑建設の議を建つ、鹿兒島人中に募金して、助成するの趣意を主唱せり、(中略) 当時戦亡者の屍ハ、上野山王臺に火葬したる儘、土墳草藪の中にあるを見て、回想したるに仍れり、阿部潜・榎本享蔵の諸氏落涙感歎して、頗る感情を和けた

③「四十四歳、明治四年辛未東京に在留す、

明治四年の夏、伊地知正治に議して、勸農工学校及び試験場を創設して、勸奨せむ事を謀り、大久保利通に建議す、小石川小日向辺に地所を見計ひたり、伊地知と一日其箇所を見る、宇都宮三郎・榎本享蔵・阿部潜氏も同論にて周旋せり、

当時旧幕人にして、才幹識量を有する輩にして、方向に迷ひ、衣食に窮するの情況見るに忍ひざるあり、予依て数輩を官途に推挙せしことあり、榎本享蔵氏を黒田了介氏に推挙し、開拓使七等出仕に任用せらる、山縣十蔵氏(後海軍主計監)を川村純義に推挙して、兵部省出仕に任用せられたり、之れ皆塗炭の苦界に陥られしを憐みて、尽力したるものなり、又桑名藩士中村猛夫を、伊地知正治に紹介して、司法省吏に就かしめたり、阿部潜氏を大久保利通に勧め、大蔵省七等出仕に出頭せしむ、齋藤辰吉(後中野梧一)を山口県参事に勧めたり、(中略)、

予當時の情況を顧み、兵制更革の意見を主張する処あり、西郷隆盛等軍人一派の意見と衝突し、嫉視を買ふ、終に帰郷の命を受けるに至れり、十二月初東京を去る、郵船東京丸に塔して、同二十九日鹿兒島に帰着したり、(後略)「

薩摩藩士「市来四郎」は、文政十一年(一八二八)十二月生まれ、明治三十六年(一九〇三)二月、七十六歳で没。諱は廣貫という。父は薩摩藩士寺師次右衛門正容である。⁽⁸⁾その次男の四郎は、市来政直の養子となった。島津斉彬に用いられて、砲術の研究や反射炉の築造等

鹿児島藩士市来四郎がこの時期、相当な活躍をしていること、とくに旧幕臣の諸氏と交流があったことがわかる。

二 「お貸人」にかかわる史料（静岡藩の場合）

（A）石橋絢彦「沼津兵学校沿革（六）^⑧」記述のお貸人

諸藩への御貸人

此頃諸藩に於ては兵制改革の当時者之きのみならず、海軍の士官には殊に欠乏し居たり故を以て明治初年函館へ脱走した後、官軍に降り諸藩へ預けられたる人々は放免後、其藩に聘せられて直臣となりし者も多しといふ、又、此輩の其の藩に止りて英語又は数学などを教授せし者も多しといふ、

斯る有様なれば沼津兵学校の名声忽ち諸藩に伝播し、諸藩より種々の教師を聘せんとするの照会あり、明治三年閏十月鹿児島藩より兵学校を設立するに付、当事者を雇聘せんことを照会ありたり、此時は西頭取赤松教授方も朝廷へ出仕したる後なれば、阿部氏は自らも出張し、且、沼津より蓮池父子並資業生堀田等を同伴し、静岡より名村五八郎を英学教師として同伴したり、之に依て後、沼津より乙骨、蘭の二先生静岡に移れり、右御貸人の総人名は到底詳ならざるも今其一部を左に記す

阿部潜 旧名 邦之助 明治三年閏十月芸州藩^⑨にて兵学校設立に付顧問として一時御貸人

蓮池新十郎 同時阿部氏と同行

蓮池 源吾 新十郎倅同断

堀田徳治郎 同時同断

名村五八郎 当時小島勤番組世話頭取なるが明治三年閏十月鹿児島藩より同所に洋学局創建被致度に付五十ヶ月程御貸人

小林彌三郎 同断

佐久間貞一 同断

吹田 鯛六 明治三年誤て都甲勲を刺殺すによりて鹿児島藩の聘に応ず

塚原 靖 明治四年正月医学修業の爲め静岡に移り翌五年□月陸軍医学校に移り（此時まで資業生なり）後鹿児島に赴く

望月 次郎 同断塚原と全く鹿児島に赴き明治七年二月山田氏と共に出京

山田 昌邦 明治二年□月出京同六年七月鹿児島に赴き翌年二月帰京す

矢吹 秀一 明治五年頃鹿児島藩に聘せらる

石井 至凝 旧名新八阿州藩に聘せられたるも□月^⑩にして辞す

山田 樂 小学校教官阿州に聘せられたりといふ

関廣右衛門 元砲兵差図役紀州藩に聘せらる

瀬名錫太郎 某藩に聘せらる

右の如く諸先生の天朝御雇又は他藩へ御貸人となりて沼津を去る

人々多き・（後略）

（B）石橋純彦「沼津兵学校沿革（二）」に記述の鹿児島島の模様の寄書^①

○鹿児島よりの寄書（明治三年十一月頃）

当藩の改革は恰も西洋の如し、士族上等開作兵には百石の地を与へ、二等には五十石の地を与ふ、尤も作り取りには無之、右を本籍として兵備を勤むる由、常備二十五大隊、予備十六大隊、常備の兵は十八歳より二十歳迄を限りとし、農兵には無之士卒なり、兵制は徳川氏の仏の伝習式を用い、静岡より教師を招き、一ケ年五百両宛の給にて本国へ往き、改めて帰国の時は二三百両宛を給ふ、家作を改造するに大体兵士の家は、筵^となどにて覆ひたるもあり、藩人の勉強すること西洋人の如し、（中略）

徳川氏の内、箱館降伏人各所、戦争脱士等の内にて薩へ往たる人多し、田賀上総、阿部邦之助薩にある由、薩州五十大隊を整へ西郷氏は率いて出京し、兵力を以て建議の事を押通し天下の覇主となる可き企有之候由、実否不詳、

編集曰く、多賀上総介は前銃隊頭にて函館脱走の一人、阿部邦之助は本校創立者の一人。

沼津兵学校・同附属小学校から鹿児島藩や徳島藩、松江藩、鳥取藩、岡山藩などへ招かれていった人物を静岡藩では「お貸人^{おかしなひと}」と称してい

る。史料（A）・（B）は、沼津兵学校第三期資養生石橋純彦氏記述による『沼津兵学校沿革』^②（以下「沿革」と略す）で、お貸人の関係史料の底本となって広く活用されている。

ところで、お貸人の肩書をみると、兵学校の教授方、教授方手伝、資養生などとなっている。そのほか沼津兵学校関係以外の人（幕臣人見寧や佐久間貞一ら）も、かなり鹿児島藩を訪れ、殖産興業や教育実状とその振興ぶりを学びとり、後年に私立学校を興したり、印刷・活版の舎（秀英社）を創立したりしている。

「資養生^③」というのは、沼津兵学校の生徒である。毎月四両の手当てが支給され、学問に精進することが目標であったし、資養生になることが一家一身の光栄そのものであった。資養生の多くは、兵学校附属の寄宿舎に起臥し、この中から人物も多く輩出している。

また、沼津兵学校の教授には、頭取西周以下、旧幕府の優秀な学者や技術者、軍人らが名を連ね、英語・仏語・蘭語・算学・操練術・砲兵術・測量術などや医術・書史・書籍掛等の教科担当者が多数居て実力を発揮している。全体的には理数系・医術系の比重が高かったようである。なお、医学資養生（医学希望者）は静岡病院へ派遣され修業している。

ところで、（A）の史料では「諸藩へのお貸人」について、とくに明治三年（一八七〇）閏十月鹿児島藩に招かれた人物・阿部潜をはじめ計十二人が挙げられている（一部阿州藩、紀州藩への招聘者が載る）。阿部潜の所の記載に芸州藩とあるがこれは鹿児島藩のことであ

る。(B)の史料は、明治三年十一月頃の鹿児島藩の模様を寄書したものの一部紹介であるが、おそらくお貸人の誰かが書き記したものとおもわれる。仏国の伝習式兵制を習得するため静岡から教師(お貸人)を招き、一か年五百両の給金及び帰国時に二三百両宛支給するという内容や、箱館戦争脱士者(多賀上総等)が薩摩へ往ったことなどが載せられている。

では以下、鹿児島藩に招聘されたお貸人について概略みてみよう。

阿部潜⁽¹⁾ 天保十年(一八三九)一月二日生まれ、諱は潜、通称邦之助。幕臣で慶応三年十二月寄合から目付となり、明治元年(一八六八)二月辞任、まもなく陸軍重立取扱となる。近代的陸軍士官の養成に心して建白書をつくり、江原素六の賛同もあって元年五月、徳川主家の駿河移封と共にこれを献言、沼津に士官養成の学校設立が決まった

自ら兵学校設立の大綱を決め、教授の人選を終え、旧幕府の陸海軍関係者を東京から呼んだりして、十二月に沼津兵学校を開校、頭取に西周を招請している。明治二年正月沼津奉行、八月静岡藩少参事軍事掛、同三年閏十月鹿児島藩に赴き、兵学校設立顧問となった。前述『市来四郎自叙伝』によると、薩摩藩の要人は戊辰戦争前後から阿部潜と面識があり、阿部を通して密接な人的交流が行われていたことに注目したい。鹿児島藩からの招聘申し出に、阿部潜自らがその労をとって蓮池ら数名を同伴することになったのである。鹿児島では兵学校の設立、その組織・運営等に大きくかかわって指導したものと考えられる。のち、阿部は、市来四郎から大久保利通に勧めて、大蔵省七等

の出仕となっているが、鹿児島派遣後の動静の一端がうかがえる。

蓮池新十郎 鹿児島藩の学制改革全般に重要かつ指導的な役割を果たしたお貸人である。この人の消息は目下不詳であり、人物資料も極めて少なく、傍証的な資料・文献から性格を推測したり、彼の学制・教育改革の足跡を業績から辿ってみるというほかはないようである。

ちなみに、金城隠士の「沼津時代の回顧(三)」⁽²⁾には、「沼津小学校、当初の頭取は蓮池新十郎といふ人で、僕等は実に可憐い先生だと思ふて居た。頭取とは校長の事で(中略)、頭取は六づかしい顔をして、折々、教室を見回りに来た。授業はしなかった。而して其の頭取は、何時の間に去ったか僕等生徒は知らずにいた」と記している。倉沢剛の『幕末教育史の研究三』では、「頭取蓮池新十郎は寛厚篤実の士、初め兵学校三等教授方兼任、のち専任となって附属小学校のことに尽力した」と記述している。

蓮池については、「沿革(六)」⁽³⁾のほか、肩書等の簡単な紹介はみられるが、どのような活動をしたかは鹿児島藩の学制改革から跡付けられないような活動をしたかは鹿児島藩の学制改革から跡付けられないようである。明治三年閏十月、阿部潜を顧問とする鹿児島藩へのお貸人として同道し、同四年初めに学校・普通教育の振興を旨指すという藩の施策の下に、まず造士館の改革に指導的役割を発揮し、いわゆる「静岡方式」が改革の骨子となって「本学校―小学校・郷校の制」が樹立された。この方式に基づいた学校・教育改革についての論考は次回(二)にゆずるが、蓮池の改革意見やその指導的役割の効果は、鹿児島の城下及び外城において、小学校・郷校がかなりの数の

増設をみ、近代学校制度の導入過程として、その実態と性格を見極めることができる。拙稿の鹿児島藩・県における小学・郷校の研究発表もこれに関係するものである。また、当考察・三の史料でみられるように、蓮池は鹿児島の本学校の身分・肩書で、新立県「都城県」の学制についてもかわりをもっていったことがわかった。

蓮池源吾 蓮池新十郎の倅源吾も、明治三年閏十月に鹿児島藩に招かれて同行し、体操の教員として従事している。近代学校教育の教科指導には、西洋型の体操や音楽などが取り上げられるようになり、源吾は新教科指導の役割を担ったものと考えられる。

堀田徳次郎¹⁷ 沼津兵学校第二期生。東京では赤松則良（兵学校一等教授方）に寄宿して修学、のち阿部・蓮池らと共に鹿児島藩へお貸人として出向いている。鹿児島では学校教官となっているがどんな学科を担当したかは不詳である。

名村五八郎¹⁸ 小島勤番組世話頭取（前記史料（A））。明治三年閏十月阿部・蓮池らと同行、鹿児島藩へ聘せられた人で、五十か月程の約束というお貸人である。史料文に「洋学局創建被度」とある。この点、鹿児島藩の洋学局（明治元年三月創設）は、同四年一月廃止され和漢洋三学兼修となったが、これにかかわったという記述事項ではなからうか。

小林弥三郎 前記史料（A）では、名村五八郎の次に名前があり、「同断」とある。すなわち、明治三年閏十月鹿児島へ招聘のことである。この人については目下のところ不詳である。

佐久間貞一 前記史料（A）では「同断」とあり、阿部・蓮池・名村らと共に鹿児島藩に招かれたお貸人の一人である。『佐久間貞一小伝』¹⁹には、明治四年十一月九日鹿児島留学中、長崎に於て撮影した写真に「佐久間千三郎君」（後年貞一）とある。父の時代に江戸に来て幕府の士となる。幼にして任侠・剛愎、負けず嫌いの性格、維新後に遠州掛川で保田塾に通い、のち東京で安井息軒に学んでいる。明治四年、小橋先生の薩州佐土原藩招聘に、同伴を請うて九州に行っている。「鹿児島藩に留まること暫くにして帰れり」とあり、のち専ら殖産興業に努め、印刷・用紙の会社を設立、明治九年秀英舎を創設、東京で市区会議員などを歴任、同三十一年十一月六日逝去。

吹田鯛六²⁰ 沼津兵学校第四期資業生で寄宿連・南寮にて望月次郎と同室。「沿革（五）」には、「燕趙悲歌の士なり、明治三年七月誤て同志都甲勲を殺す、後鹿児島藩に聘せられて教官として之に赴き、後農商務省特許局審査官となり（明治三十年八月）病没」とある。殺害の原因は痛飲劇談・両人の真剣剣舞の折、誤って都甲を刺したことにあり、屠腹謝罪せんことを止められ、頭取大築氏に諭され閉居、数か月後鹿児島藩に招かれた。明治四年十月には「集学所」教師となるため帰京しているから、阿部や蓮池らと同行した時点からは約一か年在鹿したことになる。

塚原 靖 嘉永一・三・一（大正六・七・五）沼津兵学校第四期資業生で明治二年九月甲科及弟の実力者である。「沿革（五）」資業生の項に、「旧名直太郎、澁柿園と号す、四年医学に転じ静岡病院に学び、

翌年東京陸軍病院に入り、のち鹿児島藩の聘に応じて同所に赴き教官となり、その後東京日々新聞の主筆歴史小説を著す数十部」とある。鹿児島行きは明治五年に志願し、鹿児島で医学修業の傍ら教官となっている。のち帰って「修学所」を開き、英・漢を教えている。鹿児島での教授科目ははっきりしないが、医学系学問や英語、漢学等を指導したのではないだろうか。

望月次郎（二郎）⁽²²⁾ 沼津兵学校第三期資業生で南寮の寄宿連、医師志願者の一人である。「沿革（五）」の資業生の項には、「明治四年静岡に行き医学を修め、五年陸軍病院に入り、後鹿児島藩の聘に応じ、塚原と共に其地へ赴き、後大蔵省翻訳局生徒、後経済雜誌社に入り田口卯吉と共に執筆」とある。鹿児島行きは明治五年に志願し、塚原靖同様に医学修業もめざしたが、現地では専ら英語教授にあたっている。同七年二月には山田昌邦と共に東京している。

矢吹秀一 矢吹の履歴の頭書には、「明治元年二月歩兵差図役下役（旧幕府）、同年十月沼津兵学校生徒（静岡藩）、同二年七月沼津兵学校資業生第三期生（沼津兵学校）、同四年八月依願免資業生、同四年十二月三日陸軍少尉、……」とある。「沿革（八）」では、「矢吹秀一君は初名を恒蔵と称し同じく資業生なりしが、明治四年秋出京し、次で鹿児島藩に聘せられ、後れて陸軍省に入り工兵科に属したり」とある。鹿児島藩の招きで出かけたのは、おそらく明治四年末から同五年初めではないかということと、当地では兵学修業の傍ら数学を教授したのではないかと考えられる。のち陸軍中将、男爵となっている。

志村太郎（貞鏡）⁽²³⁾ 沼津兵学校第四期資業生で医学希望者である。

「沿革（五）」の資業生の項には、「旧名太郎、八王子千人頭の家柄なり、体軀矮小なれども老成才子の風あり、四年医学に転じ静岡病院に学び、五年出京、陸軍病院に入り、後塚原と同じく鹿児島藩の聘に応じて教官となりて同地に居る」とある。宮地正人氏論文⁽²⁶⁾の中の「沼津兵学校と志村太郎」という記述ではかなり詳細な人物紹介がなされている。要点をあげれば、資業生採用試験で算術が上の中の第三番の優秀な成績であったこと、明治三年閏十月二十五日医学修業のため静岡派遣を申し渡されたこと、同四年二月八日塚原直太郎・小川元治郎と共に鹿児島藩での医学修業を命ぜられたこと（身分は兵学校資業生）、二月十七日鹿児島藩邸で市来四郎・市来宗七と面会し委細相談していること、二十四日横浜出帆、二十八日長崎、三月四日川内川尻に寄港、五日鹿児島到着、四月十四日、本学校の寮二階六畳（二人部屋）に引移ったこと、三月二十一日藩知事島津忠義の学校見廻りで、志村・塚原・小川の三名が拝謁をうけ琉球紬一反宛下賜されたこと、さらに医学修業の期待も空しく「修業もろくろく出来不申、先てハ算術教師ヲ居候積リ日々小学校ニテ二時間算術ヲ教へ、一字間英人ウイリス江通弁ノ授業有之候のみニ候間、静岡之方却テ稽古出来可申と後悔いたす候間、一ト先帰国之上相談いたし、一身之進退取極申渡」とあったことを宮地氏の論文では紹介している。つまり、鹿児島側は志村というお貸人を教師として招聘したという考え方であり、志村の方は資業生として医学修業に来鹿したんだという、そこに両者の矛盾があったよ

うである。結局、父不快という口実で帰国願いを出し、小林弥三郎の帰国と同道、明治四年十二月十一日沼津に帰っている。五年一月十日資養生御免願いを許され、江戸に出て英学を学んでいるが、のち工部省で学び奉職している。

山田昌邦 『沼津兵学校の群像』²⁷には、「教授方手伝、山田昌邦、嘉永一〜大正二五・一一・一二」とあり、「沿革（五）」では「三等教授方並、山田昌邦 旧名清五郎、後開拓使に奉職したるも辞して製鋼事業に尽瘁す、我邦に於ける此業の白眉なり、今東京製鋼会社の重役たり」と記している。また、「沿革（八）」逸話之部では「脱艦美賀保丸と山田昌邦君」と題した記述のなかで、「旧名清五郎といふ幕府の徒士なり、早く海軍操練所に入り航海術を学ぶ云々」とあり、箱館戦争参加途中に船の暗礁、その後以降伏、自首などの経過が載せられており、鹿児島には明治六年七月に来て、航海術や算術等を教授したものとおもわれる。同七年二月には帰国している。

三 お貸人「蓮池新十郎」に関することの記述・史料 (鹿児島藩・県、および都城県の場合)

(イ)『鹿児島県史』第三巻での記述

「その後、静岡の人蓮池新十郎を雇傭して学制に根本的改革を加え、四年正月十日洋学局を廃し、その跡に本学校を建て、又島津隼人屋敷内に小学第一校を、生産方引続きに小学第二校を建て、本学校管轄とした（後略）」

(ロ)『鹿児島県教育史』²⁸での記述

「本学校―小学校・郷校制の確立 一八七一（明治四）年正月、静岡県人蓮池新十郎が雇用され、その意見に基づき、学制に根本的改革が加えられ、従来の和・漢・洋三局鼎立の制が改められ、本学校―小学校制が確立された。改正のねらいは、これまでの洋学中心主義を一掃し、和・漢・洋の三学を兼修させ、普通の学問をもって将来国家有為の人材育成の基礎にすべしという点にあった。その結果、洋学局は廃止されて、その跡に本学校が建てられ、さらに元島津隼人屋敷内に小学第一校、生産方に小学第二校、さらに四月には第三校・第四校が建てられて、本学校の管轄となった。（後略）」

(ハ)『人物を中心とした教育郷土史』²⁹での記述

「しかし明治四年、洋学中心のあり方が反省され、静岡の人、蓮池新十郎を招いて、三局鼎立の制を大改革することとなった。それによると、生徒には和・漢・洋学を兼修させることになり、従来あまりにも重要視されていた洋学局は廃止され、そのあとに本学校が設置され、小学校も二校できた。後に和・漢学両局も廃止された。本学校は小学校卒を収容する中等教育機関であるとともに、小学校、郷校を所管する教育行政機関でもあった。郷校は藩政時代以来次々と城下および城外に設置された。そして明治四年の廃藩置県当時、本学校所管の学校は、小学校四、城下郷校七、外城郷校二三となり、相当の教育の普及をみた（後略）」

(二)『鹿児島百年(中)明治編』での記述

「明治四年の藩校改革は大きかりなものであった。プランを立てたのはこの年、藩庁のアドバイザーとして招かれた静岡県の蓮池新十郎。蓮池は到着早々、知政所(県庁)に意見書を出した。

「造士館の洋学中心は好ましくない。これからの教育は専門知識よりも広い教養を教えることがたいせつである。また上級学校ばかり先実しても意味はない。むしろ初等教育に力をそぐべきだ」

蓮池の意見はただちに採用された。まず洋学局がこの年正月廃止され、残る和、漢の両局も廃藩置県の直後の明治四年十月に廃止。そして造士館は鹿児島本学校と改称され、以後、和、漢、洋の三科目が必修となったのである。」

(ホ) 明治四年四月九日付「伊地知正治の内田・黒田宛書簡」に記された蓮池先生

○伊地知正治ヨリ内田政風・黒田清綱へ書簡³¹⁾

「尚々暫時不得貴意候得共、御奉職奉大慶候、(中略) 近頃静岡ノ人蓮之池先生御頼入候テ、学校御取興相成候処、小学三ヶ所ニテ生徒六百位、外ニ郷校十三所本校ニ不相替盛ナルモノ三ツ余、逐々相調候様子、生徒千八百余、五ツヨリ七ツ時迄毎日ノ勉強、目覚敷次第々々ニ御座候、尤先生才徳兼備頗ル賢者ノ風アル故、諸人一同納得無此上幸甚御座候、(中略)」

未四月九日

伊地知正治

内田仲之助様

黒田 嘉納様

侍史御中

(ヘ) 学制頒布五十年記念号「鹿児島教育」での記述

「第一校は静岡の蓮池某の意見により学校の仕組を立てられたもので、体操教員蓮池源吾と云うは即ち其令息である。」

(ト)「都城県上村典事から鹿児島県本学校蓮池新十郎・藤田世吉宛、師員御依頼の書状」³²⁾

算術専門 川面新之丞

体操専門 井上 勇雄

右者当県下学校設建ニ付及御相談趣有之先達テより右兩人被差越、御蔭を以日々生徒進歩ニ至リ多幸之至候、然処最早期限も相満候ニ付助練合を以両名交代之人員御遣給度、其方ニと当時御差支之程深致推察候得共、己ニ新学校開業之処飫肥表より五六名致人撰殊ニ此節一級等進之者両三名有之候ニ付、此節交代ニハ一級生之指南方充分相整候者御吟味之上御遣給度、兼テ師員御練合御高配之段飽迄乍承知旁姿成御頼談ニ候得共、先日桂参事より細々蓮池氏江及御相談候処、御懇詞之趣も致報知、無抛及御頼談候間、新県下別段之御処分ニ預度、此段及御掛合候以上

壬申四月

上村典事

本学校

蓮池新十郎殿

藤田 世吉殿

(チ)「都城県上村典事から鹿兒島県本学校蓮池新十郎・藤田世吉宛、

垂水・新城等郷校関係引受依頼の書状」

都城県内諸郷学校番号之儀ニ付テハ此節桂参事より及御相談置候ニ而、垂水新城華岡郷之如き己ニ其御校管轄ニ相成居、其余之数郷も追々小学校規則を遵奉郷校相開度願出、其通允許相成候付テハ、近来検査を願又ハ師員之配教検査願出候向も可有之、就テハ

当県下学校之儀ハ設建涯之事ニテ此涯管内郷校之検査等相整候丈ニ無之候間、試験ハ勿論師員配教旁従前之通御校一切引受御取扱給度、左候テ郷校之内爾後実功相立管轄免許相成候節ハ、御評決之上当県庁江申越可給候此段及御頼談候也

但当県内垂水其外諸郷之内其御校管轄相成候校々ハ番号為御知可給候

壬申四月十八日

上村典事

本学校

蓮池新十郎殿

藤田 世吉殿

本題三の考察では、明治四年初め鹿兒島藩の学制改革に大きな貢献をなしたお貸人「蓮池新十郎」に関して、派遣地鹿兒島と新設の都城県にみられる文献内容や史料を取り上げてみた。この点で指摘できることは、蓮池の意見や指導によって実施されたとみられる学制改革の

経過的または状況的な報告内容が主であって、蓮池新十郎が関係したであろう学制改革の、たとえば直接の改革上申書や意見書といった直接の史料文が極めて少ないということである。それ故、鹿兒島藩の知政所（県庁）から発せられた学制改革の達し内容から、蓮池の指導及び学校施策の具体的状況を裏付けるとする方法にならざるを得ないものと解している。

(イ) (三) の記述は、鹿兒島県史や教育史、教育郷土史、鹿兒島百年（中）明治編などの文献からとった蓮池新十郎に関する内容部分である。(ホ) は、薩摩藩士・官吏の伊地知正治が内田政風（薩摩藩士・主に京都留守居役）・黒田清綱（薩摩藩士・官吏）に宛てた書簡で、蓮池先生ご頼入と学校改革の状況、および先生の才徳兼備・賢者の風格についてふれている。(ヘ) は、蓮池新十郎の子息源吾が体操教員であったことの文献資料である。おそらく鹿兒島城下の小学第一校などで指導したものと考えられる。(ト) (チ) の史料は、新県となつた都城県（明治四・一一・一四〜同六・一・一五）の上村典事から、鹿兒島県本学校の蓮池新十郎・藤田世吉両氏に宛てた郷学教員や試験等についての頼談書状である。

(ト) は鹿兒島県から算術・体操の師員派遣の交代と、今回一級生徒も出たのでこの指導もできる師員を遣わしてほしいという内容であり、(チ) は元鹿兒島藩所屬の垂水・新城・華岡等の諸郷の郷校について、在鹿兒島藩時の郷校検査・試験実施・師員配置などを従来通り引き受けてほしいこと、本学校管轄の郷校番号も判明したら知らせてほしい

旨の、都城県側の依頼内容である。ともに都城県上村典事の名で、鹿児島県本学校蓮池新十郎・藤田世吉宛に出されたものである。

注目したいのは、蓮池新十郎が本学校を代表する一人であったこと、桂参事との仲継的な相談もなされていたこと（ト、チの史料文中）である。

とすると、蓮池新十郎は鹿児島藩・県でお貸人としての活躍のみならず、都城県の小学・郷校の学制改革にも直接または間接にかかわっていたということが考察される。

小括

本稿では、明治三年閏十月に鹿児島藩に聘せられた阿部潜・蓮池新十郎らお貸人と、その後に関わられた望月次郎・矢吹秀一らお貸人を挙げ、各人の紹介と在鹿で知りうる範囲内の活躍や事柄についてみてきた。とくに、明治四年初めに、藩学造士館の改革、本学校・小学校・郷校制を立て、普通教育の振興を図るべくその施策に大きく貢献した蓮池新十郎の人物について、これまた、知りうる範囲で探索を試み紹介をした。一方、当時鹿児島藩で、旧幕士とかなり幅広い接触をもっていた市来四郎を挙げ、彼の自叙伝を通して両藩の人的交流をはじめ、兵学校創設のため鹿児島藩に招聘することの交渉を図ったり、また、彼我の状況を的確にとらえて判断し、両藩の関係修復を図るなど多く評価できる人物として取り上げた。しかしながら、「お貸人」に関し、招聘した鹿児島藩には関係史料が極めて少なく、今後の課題としてそ

の発見につとめなければならないが、お気付きの点があればご教示いただきたくお願いしたい。

この度の研究に沼津市立図書館主幹兼図書係長佐藤和成氏、同明治史料館主任学芸員樋口雄彦氏をはじめ関係職員の方々の懇切なるご協力に感謝し、同じくご指導・ご鞭撻をいただいた教育学専攻同僚の四方一弥教授、湯川次義助教授に対し深甚の謝意を表します。

註

- (1) 『鹿児島県史料・忠義公史料』第七卷末・忠義公年表
- (2) 明治二年二月二十日藩治職制（同『忠義公史料』第六卷五〇号二）。
- 同年三月七日「学館」と呼称（同『忠義公史料』第六卷一九一号、
- 『薩摩旧記雑録追録八（卷一七六）』（同八三五号の五）。
- (3) 明治四年一月十日「藩庁ニテハ洋学局ヲ廃シテ本学校トシ、小学校ニ校ヲ創建シテ之ニ附属セシメ、皇漢洋学ヲ兼修セシメテ普通学ヲ開キ、国家有用ノ人材ヲ養成スベキヲ達ス」（同『忠義公史料』第七卷末・忠義公年表）
- (4) 石橋絢彦「沼津兵学校職員伝（三）阿部潜君伝」（同方会誌第五一号）。橋尾四郎「阿部潜の生涯と行動」（沼津史談第三号・昭和四〇年三月）など。
- (5) 【お貸人に関して】倉沢剛『幕末教育史の研究』第三卷・五〇五〜五〇六頁。鈴木栄樹『公文書』中にみえる静岡藩の御貸人「たち」（静岡県近代史研究会報・一四七号、一〜三頁）。『沼津兵学校の群像』（沼津市明治史料館編、一〇頁）。

【お貸人の諸藩での業績に関して】乙竹岩造『日本教育史の研究・第一輯』（目黒書店、昭和一〇年）。影山昇『日本近代教育の遺産』（第一法規出版、昭和四〇年）。橋尾四郎『沼津兵学校と同附属小学校の鹿児島・徳島への影響について』（沼津史談第四号、昭和四〇年）。倉沢剛『幕末教育史の研究』第三卷（吉川弘文館、昭和六一年）など。

【他藩員外生に関して】熊澤恵里子『沼津兵学校における『他藩員外生』―福井藩を事例として―』（沼津市研究第六号、一九九六年）などがある。

(6) 『鹿児島県史料・忠義公史料』第七卷末に所収。自叙伝は文政十一年から明治二十三年十二月五日で終わっている。当時の時代経過と共に薩摩藩及び東京や他藩の状況・世情・諸藩との交流・諸関係などが記録され、当時を知る貴重な史料である。

(7) 前島密は幕臣、洋学者。慶応元年薩摩藩に招かれ開成所で英学を教え、同三年帰国。鹿児島藩で兵学校を創る前に洋学の指導者として来鹿している。

(8) 市来四郎の兄は寺師宗道といい、『宗道日記』を著しており、維新期薩摩藩を知る手掛かりともなっている。

(9) 石橋純彦『沼津兵学校沿革（六）』（同方会誌第四三号、大正五年十二月）。

(10) 芸州藩とあるのは鹿児島藩の間違いである。

(11) 前掲註9。この寄書のほかに当時の鹿児島について、薩摩事情（明治三年十二月某氏書翰）や静岡藩士の鹿児島だより―柏木忠俊宛吹田鯛六書状（史料紹介―樋口雄彦『韭山』の町史の葉』第十五集）、

『当今街説』（前掲『忠義公史料』第七卷一〇八号）などがある。

(12) 石橋純彦『沼津兵学校沿革（二）』（八）（沼津市立図書館、沼津市

明治史料館）。

(13) 金城隠士「沼津時代の回顧」（『沼津兵学校の群像』沼津市明治史料館、四九頁）。

(14) 前掲註4参照。このほか日本歴史学会編『明治維新人名辞典』（吉川弘文館）など。

(15) 前掲註13参照。『沼津兵学校の群像』五一頁。

(16) 前掲『沼津兵学校沿革（三）』（同方会誌第四〇号、大正四年十二月）、『同沿革（五）』（同第四二号、大正五年六月）。なお宮地正人「静岡県近代史研究第一五号の論文中の「五、沼津兵学校と志村太郎」では「三等教授方カノニエ掛蓮池新十郎」という新史料をあげ、カノニエは仏語で砲兵の意であると指摘している。

(17) 「沼津兵学校沿革（五）」前掲註参照。

(18) 「沼津兵学校沿革（六）」（同方会誌第四二号、大正五年十二月）。

(19) 豊原文男「佐久間貞一小伝」（沼津市明治資料館樋口雄彦氏提供）。

(20) 〃（22）前掲註16参照、「沼津兵学校沿革（五）」所収。

(23) 樋口雄彦「沼津兵学校関係人物履歴集成」（沼津市立博物館紀要二二号、一九九八年三月）。

(24) 「沼津兵学校沿革（八）」（同方会誌第四八号、大正七年十一月）。

(25) 前掲註16、「同沿革（五）」。

(26) 宮地正人「八王子千人隊の静岡移住―千人隊之頭志村源一郎を中心として―」（『静岡県近代史研究』第十五号、一九八九年十月）。

(27) 「沼津兵学校の群像」沼津市明治史料館発行、一三五頁。

(28) 「鹿児島県教育史」鹿児島県教育会編、復刻版昭和五十一年、二三五頁。

(29) 『人物を中心とした教育郷土史』 文部省大臣官房調査統計課編、昭和四十七年、七七二頁。

(30) 『鹿児島百年(中) 明治編』 南日本新聞社編、昭和四十二年、九〇頁。

(31) 『鹿児島県史料・忠義公史料』 第七卷八六ノ三号。この史料文のあとに「(按) 本書ハ四月九日親兵ノ乗船ニ託シテ贈リシモノナリ、書中静岡人蓮池ヲ雇ヒ教頭トナシ、学事ヲ理シムルノ文アリ、之レノ事ニ係ハレリ、又郷校十三ヶ所設置ノ記事アリ、本年 月 日平之馬場郷校設置ノ達アリシモ、余ヶ所ノ郷校設置ノ達ヲ欠ケリ、思フニ平之馬場郷校ヲ設置シタル以来、各区競フテ之ヲ設置スルニ至リ、別ニ達令ニ及ハサリシモノナラン。(後略)」という掲載がなされている。

(32) 宮崎県立図書館蔵「小学館一巻、第一冊」。なお、上村典事は都城県学校掛である。

(33) 前掲註32と同じ。

(本学教授・教育学)